

現代インドの巨人： アンベードカル博士

宮原 豊（9 組）

最近インド独立の父・ガンディー、インド独立の闘士チャンドラ・ボースについて投稿しましたが、ここに私の最も尊敬する人物の一人として、アンベードカル博士のことを紹介したいと思います。（以下、敬称略で）



アンベードカルは、インド独立の父と呼ばれるマハトマ・ガンディーに比べると、日本ではほとんど知られていません。しかし、あのガンディーに優るとも劣らない偉大な功績を残した人物です。アンベードカルのことを知れば知るほど、まさにその時代その場所に存在した、現代インドにとって最も重要な人物の一人であったことが分かります。

ビームラーオ・アンベードカル (Bhimrao Ambedkar) は 1891 年に生を受け、不可触民カースト出の人としては異例とも言える高学歴を修めました。低カーストながら経済的には比較的恵まれ教育熱心な家庭で育ち、ムンバイのエルフィンストーン大学を卒業後、1913 年バローダ藩王の海外留学奨学金を得て、米国コロンビア大学で政治学博士号を取得、英国ロンドン大学で経済学を学び、帰国後は教育と不可触民の権利を守る運動に取り組みました。1920 年には別の藩王から援助金を得て、弁護士資格を取るためにロンドンに再渡航、ロンドン大学で経済学博士、法廷弁護士の資格を得て 1923 年に帰国。少年時代に受けた被差別の苦い経験から、自ら学んだ学問を武器に政治・法曹・社会・労働・教育などの広い分野で被抑圧カーストの解放のために不屈の精神力で、とにかく生まれてから死ぬまで休むことなく常に勉学と闘争を続けた人でした。

非暴力抵抗運動のガンディーとは、「塩の行進」の後の英印間の妥協が成り立ち、1931 年に第 2 次英印円卓会議のため渡英直前に初めて直接会うこととなります。2 人の間で話し合われた不可触民問題についての考え方は噛み合わず、後にガンディーは「不可触民の（分離選挙の）権利要求を阻止する」ために死を覚悟の断食を始めますが、アンベードカルは、「ガンディーは今まで何回も抗議のために断食したが、不可触民の為に断食をしたことはない。それなのに今回は不可触民の要求を阻止するために断食をする」と非難しました。もしガンディーが「死を覚悟の断食」で死亡するようなことになれば、上位カーストの不可触民に対する暴力的な逆襲・報復の可能性が高いことから、アンベードカルは権利を放棄せざるを得ませんでした。ガンディーは不可触民をハリジャン（神の子）と呼び、国民会議派はハリジャンの社会的地位向上に努めたものの、その運動は短期間しか続きませんでした。一方、アンベードカルは自らをダリト（抑圧されている者）とアイデンティティを明確にし、はじめは「不可触民制撤廃をヒンドゥー教内部の問題として解決しよう」と取り組みましたが、次第にヒンドゥー教内部の改革に絶望し、1935 年には「ヒンドゥーとして死ぬつもりはない」と「インド文化に根差した別の宗教への改宗」

を考え始めました。

1947年にインドは独立。アンベードカルは憲法起草委員会委員長として新生インドの憲法を起草し、ネルー首相により初代法務大臣に任命されます。分離選挙区制は採用されていませんが、カースト差別の廃止、不可触民制の廃止、立法府・行政府における一定数の留保制度(ダリトの採用)などが憲法に謳われ、1949年制憲議会で採択、1950年1月26日にインド憲法が施行され、インドは共和国として新たな一歩を歩むことになりました。広大で多様なインドを、世界最大の民主主義国として一つに統合する基礎はアンベードカルによって築かれたと言っても過言ではありません。

インド憲法は時代の必要性に応じて今まで何回も改訂されていますが、アンベードカルのインド憲法の精神は変わっていません。インド民主主義の要点をまとめると、以下のようなことが言えます。1、独立以来選挙による政権交代が為されている(クーデターは絶対起こらないように分権化、文民統制が為されている)。2、三権の中では最高裁判所の権威が極めて高い(最高裁に対する国民の信頼)。3、宗教色の強い社会であるからこそ政教分離主義(世俗主義 Secularism)が徹底している。4、中央政府と地方政府の関係が絶妙である(中央政府の権力と州政府の権限のバランス)。5、官僚制は硬直的だと非難されながら、広大で多様なインドを一国としてまとめる求心力の源である、等々です。

しかし、立派な憲法があっても人間社会にトラブルは起こり、それもインドの場合は一度問題が起こると大規模な騒動となります。最近も10~20年に一度くらい政治・宗教の大トラブルが起こりました。例えば、インディラ・ガンディー首相の暗殺、その後に起こったシーク狩りでは数千人のシーク教徒が謀殺されたとか、ヒンディーとイスラムの衝突も90年代アヨーディア事件、2000年代グジャラート衝突と、現代においても一度に数千人の死者が出るような騒動は日本では考えられません。インド人は熱くなった後で我に返り深く反省し、必ず憲法の精神に立ち戻って瞑想します。もし、インドにこの憲法がなかったらどうになってしまうのか、本当に恐ろしいです。アンベードカル博士に感謝します。

さて、アンベードカルはその後、ヒンドゥー法(家族法)改正の過程で保守派の強い抵抗に遭い、1951年に法務大臣を辞職、仏教への傾斜を深めていたアンベードカルは1956年10月に妻や同胞数十万人とともに集団改宗式を行いました。すでに病魔に侵されており、2か月後に他界しました。インド仏教徒の主流をなす新仏教徒の聖典『ブッダとそのダンマ』は、「仏教とは何か」を問い、死の直前までアンベードカルが書き続けた書です。「ヒンドゥー教のダルマが儀礼の遂行や規則に陥っている」のに対し、「ブッダの教えは道徳を意味している」として、アンベードカルはサンスクリット語の「ダルマ」ではなく、パーリ語の「ダンマ」を意図的に使っていると言われます。

「遅々として進む」と言われてきたインドは、様々な政治的、社会的そして宗教的障害を内在しながらも、特に1990年代以降大きな変化を遂げています。現代インドは、アンベードカルの影響と、憲法の自由・平等の精神を糧として、政治、経済、社会、文化、宗教等々の幅広い分野で躍動的に変貌を遂げています。(18年6月6日投稿)